行 政 視 察 報 告 書

西脇市の小中学校におけるＩＣＴ教育の現状について

令和５年１月31日

西脇市議会
文教民生常任委員会

1　視察実施日

令和５年１月31日（火）

2　視察先

西脇市立芳田小学校

西脇市立重春小学校

西脇市立西脇南中学校

西脇市立西脇東中学校

3　視察事項

西脇市の小中学校におけるＩＣＴ教育の現状について

⑴　タブレットを活用した授業展開の様子

⑵　デジタル教科書の活用をはじめ、教材化の工夫（活用教科や分野、学習効果等）

⑶　ＩＣＴ支援員の活用状況

4　参加者

文教民生常任委員会

委員長	東野　敏弘	
副委員長	高瀬　　洋	
委　　員	藤原　秀樹	藤原　哲也
	高瀬　弘行	吉井　敏恭
	村岡　栄紀	林　　晴信
事務局	春岡　香織	

所　　感

東野　敏弘

今回、小規模校の芳田小学校・西脇東中学校、大規模校の重春小学校・西脇南中学校の４校の視察を短時間であったが実施することができ、西脇市のＩＣＴ教育の現状を把握するうえで、大きな意義があった。

私が視察をして問題点と感じたことは、次の４点である。

①小学校と中学校の取組の差について

小学校は、学校全体・学年全体で連携をとって取組が進められているが、中学校においては各教員、各教科の取組に任せているようである。学校間格差とともに教師間格差も生まれてきているのではないかと考える。

②教師に対する研修の必要性について

ＩＣＴ教育について、教師間格差をなくすためにも研修が必要であると考える。研修については、長期休業中でないと集中的な研修はできないと考えるが、ＩＣＴ支援員の援助、校内での教師間の日常的な教え合いが必要であると考える。

③ＩＣＴ支援員の在り方について

西脇市のＩＣＴ支援員は、ベネッセ派遣と市職員の支援員がいる。業務契約の関係はあるが、教師の授業の組立て段階においての支援（相談に乗る）が必要だと考える。

④ＩＣＴ教育の取組を継続させるための体制について

ＩＣＴ教育は、継続した取組が必要である。重春小学校では、各学年でのＩＣＴ教育を含めた成果を次年度に生かしていくシステム（教職員の学年配置を含め）で、よく考えられている。大規模校においては、ぜひ、継続させるために体制づくりをしていただきたい。ただ、各学年１学級の小規模校においては、工夫が必要である。

⑤児童生徒のＩＴクラブの創設について

児童生徒のＩＴ技術の向上は、興味関心の強さによって大きく異なる。教師の与える課題を早く終了した児童生徒が、読書等、別にすることを考えておくべきである。また、各校において、課外活動としてＩＴクラブの創設をすれば、将来大きく羽ばたく児童生徒が生まれるのではと考える。

今回の視察では、昨年５月に視察を行った時点に比べ、児童生徒のタブレット活用がスムーズであったこと、タブレットの充電機器等の取扱いの不具合が改善されていると感じた。教師の授業でのタブレッ

ト活用は、今回の視察だけでは十分に把握できなかったのが残念である。

大変忙しい中、またインフルエンザやコロナ感染が心配される中、私たちの視察を快く受け入れていただいた４校の先生方、教育委員会に感謝しています。

高瀬　　洋

昨年５月の西脇南中学校、楠丘小学校に引き続き、今回は芳田小学校、重春小学校、西脇南中学校、西脇東中学校の授業視察を行いました。

昨年10月の多治見市と芦屋市のＩＣＴを活用した教育現場の視察を経験しているので、これら他市との比較が大切ですが、私は見劣りしているような点は感じなかったし、教員の方々も機器を十分に使いこなして良い授業が行われているという印象を持ちました。ただ、教職員全体でどれだけＩＣＴによる教育が浸透しているかは分からないので、他市に見られたような、教育コンテンツ等の教材の充実や教職員のスキルアップなどへの取組をお願いしたいと思います。特に西脇市は芦屋市と同じベネッセのサポートを受けていますので、芦屋市の優れているところは取り入れてもらいたい。

また、授業以外で始業式・終業式・各種集会、運動会等のイベントのライブ中継などに使われているという説明がありましたが、児童生徒が生活を便利にする道具として、タブレットが幅広く生活に浸透することで、情報化時代に適応できる人材として成長してもらいたいと思いました。

藤原　秀樹

今回の視察で思ったことは、前回より改善はされてきているなと思いました。しかし、先進地視察した授業では、タブレットの特性を生かした工夫がされ、楽しみながら学ぶ事ができていましたが、西脇市では、まだ無理やりタブレットを使うようにした感じの印象を受けました。唯一、西脇東中学校の英語の授業が先進地と同じくタブレットの特性を生かして学べていたと思います。

西脇市のＩＣＴ教育はまだまだ改善が必要だと思います。まだまだ先進地にサポートシステムやＩＣＴ教育授業の取組方など学ぶ事が多いと思います。まず真似をし、それから独自の発展が必要だと思います。思いの強い先導者が必要であると思います。たとえばＩＣＴ教育強化センターみたいなものを作って、教育とＩＣＴの両面に精通している校長先生などをセンター長にして、現在のＩＣＴ支援員や教育委員会の専従職員を配置し、考え方・研究・開発・検証・サポートをし

てみてはどうかと思います。今後、西脇市のＩＣＴ教育にはまだまだ伸びしろがあると思います。

藤原　哲也

今回の授業参観は各クラス10分と短い時間でしたが、タブレットを使用した授業を見学させていただきました。芳田小学校・３年生／国語は作文をタブレットで作成する授業。重春小学校・２年生／国語は漢字クイズの授業。西脇南中学校・２年生／理科は電気の授業。西脇東中学校・２年生／英語。

昨年の５月に楠丘小学校・西脇南中学校のタブレット授業を見学した時と比較して、授業中にタブレットの充電が切れるというアクシデントもなく、また、通信速度の遅れによるトラブルもなく、子ども達はスムーズにタブレット（レノボ製）を使用していました。

小中学校の通信整備を完備したことにより、全科目でタブレットを使用した学習要綱は出来ていることを確認しました。

小中学校としてタブレットを使用した授業をやろうとされていることは分かりました。

しかし、今後、教員のスキルによってＩＣＴ授業の質に差が生じることがないように、本市のＩＣＴ教育をけん引するような以下の取組を提案します。

①教員からＩＣＴに長けた人材を確保し、教育委員会と学校の溝を埋めてＩＣＴ教育のレベル向上に努めて欲しい。
②本市独自の教員用ＩＣＴガイドブックを作成
③本市教育委員会独自のフォルダーを作成し、ＩＣＴ教材を本市の教員が閲覧できるようにして欲しい。そうすることで、本市の教員のスキルアップに努めて欲しい。

高瀬　弘行

今回の視察では、
・５月に市内の小中学校を視察した当時との進捗状況の推移
・学校規模による活用状況の差異
・先進地（岡崎市、芦屋市）を視察した内容との比較
など確認し、西脇市のＩＣＴ教育の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

教育的な面では
・全般的に５月の視察と比べて、スムーズな授業展開が行われていた。
・ミライシードは蓄積されているが、共有化されておらず、課題が見られた。
・今回の視察対象の学校でも、タブレットの持ち帰り頻度に多少の違

いがあったが、他の市内の小学校では、ほぼ長期休暇中だけ持ち帰る学校もあり、それは学校間の特徴と捉えていいのか、進捗の差と捉えていいのか確認が必要である。
・一方、毎日持ち帰りの学校では、ゲーム依存症などに懸念がないのかと感じた。

技術的な面では
・５月に比べ「ＩＣＴ支援員」の各学校への訪問頻度は、月２回～４回であったものが、月４回～８回と倍増しており、充実ぶりが伺われたが、大規模校である重春小学校では、８回の訪問頻度では、まだ不十分であるとの要望が強く出された。（芳田小学校と重春小学校では、生徒数は約10倍、クラス数も約４倍とのこと）
・一方、各学校で出された課題が、相談したいときに気軽に聞けるような体制作りであった。これについては、先進地と言われる岡崎市や芦屋市では、教職員の退職者が、ＩＣＴ担当者として、選任で配置されていたので、西脇市でもこのような対応が取れればと考える。
・５月当時では課題とされた、フィルタリング規制の設定レベルや充電時間についても問題とされていなかったが、教育委員会で確認したところ、「フィルタリング規制については、柔軟な対応を行ったこと、また、充電時間については、入力作業などの操作性が高まったため、充電切れまで使用することが少なくなったのではないか。」とのことであった。
・視察した学校では、オンライン配信にも積極的に取り組まれていたが、双方向の配信には、カメラなどの機材が必要であった。

まとめ
・５月当時と比較すれば、大きな進捗状況が見られた。
・学校規模による進捗状況に大きな差異は見られなかった。
・先進地との比較では、ミライシードなど活用状況のデータベース化などが遅れていると感じた。

その他、現状のＩＣＴ支援の在り方（基本は月４回で、大規模校は月８回など）に関して、各学校の進捗状況による柔軟な対応や先進地で見られたような退職後の教職員の任用などにより効果的な支援が可能となるのではないかと感じた。

吉井　敏恭

令和４年５月20日・23日の視察に続き、今回は小中学校４校を視察した。教室に入り最初に感じたのは、前回から８か月が経過し、教室内の落ち着いた様子が見受けられた。

教師の問い掛けに応え、すぐにタブレットに入力する子、全く手の

動かない子と様々である。タブレットへの習熟度によるものなのか。中にタブレットを忘れた子もいたが、タブレットに代わるペーパーが配布されていた。タブレットを忘れた者の集計はされていないとのことであった。

児童生徒１人１台のタブレットが整備され、主に教科書、黒板とノートを使った私の時代と授業も一変した。写真や動画を取り入れ、情報を瞬時に検索できる等、多様な社会環境におかれた児童生徒にとってタブレットを使用したＩＣＴ教育に期待することは大きい。

令和２年度末にＧＩＧＡスクール構想によって１人１台のタブレットが整備されたものの、資質・能力が一層確実に育成できる教育ＩＣＴ環境を実現するには多くの問題が残る。

タブレットを使用した授業を視察して、これが新しい時代の情報活用能力（思考力、読解力、科学力）を身に付ける効果に本当に繋がるのか、疑問である。自分の頭にあるもの、記憶したものを鉛筆で書く力も必要で「ＩＣＴとのベストミックスを図る」との教育委員会の説明に期待する。

先に文教民生常任委員会において視察した先進地（多治見市、岡崎市、芦屋市）の取組では、ＧＩＧＡスクール構想に先んじ、多くのＩＣＴ化を推進する教員等の旗振り役（先人）の存在が確認でき、それが実績に結びついている。

西脇市においても支援員、サポータの配置に加え、特に導入期の今にあっては、旗振り役を担える教育現場での経験も深い（ＩＣＴの能力のある）ＯＢ教職員等の増員も必要ではないか。教職員のスキルアップを図ることは当然であるが、苦手な者は、やはり苦手である。教育を提供する学校側にあっては、教職員のＩＣＴの能力について一定の基準を保証する必要がある。教職員の能力によって生じる差を最小限に留めるためにも、教職員への支援が必用である。

「タブレットの持ち帰り」について学校間での相違が生じている。「持ち帰り」を取り止めた理由に、保護者からの「ゲームに関わるリスク」の申出があったと聞く。「タブレットの持ち帰り」には賛否両論あるが、ＩＣＴ教育の推進には保護者とのメリット、デメリットの情報の共有が必要である。小中学校間でも協議を重ね、市内で共通した考え方によることが必要である。

令和７年に迎える端末更新時には、多くの問題が予想される。それまでに教育現場におけるタブレットの使用が定着していることを望む。

ＩＣＴ教育と関係ないが、充電アダプターのコードが廊下に垂れ下がった状況が前回の５月から何等変わらない。この状況が平気で、注意することもないのであれば、ＩＣＴ教育以前の問題と考えるが、私だけの思いなのか。

タブレットを用いた教育が、新しい時代の情報活用能力（思考力、読解力、科学力）を身に付ける効果に繋がるのか、私には疑問が残る。
特に導入期の今、教育を提供する学校への支援体制を十二分に構築し、ＧＩＧＡスクール構想を推進することで、保護者の抱く不安を払拭することが大切である。

村岡　栄紀

現時点での西脇市におけるＩＣＴ教育のレベルに関して、授業を少し参観しただけですが、タブレットに慣れ、使いこなすというハード面に重きが置かれており、オンラインを活用してどのように授業を展開していくのかといったソフト面（授業のクオリティ）に関することはまだまだこれからのことだと感じました。
教育委員会は学校へＩＣＴ機器の導入や、先生への研修を行っておられるようだが、研修を行っても具体的にどのように活用するかまでは教育委員会と学校との間で意思疎通ができておらず、ほとんどが学校現場の裁量に委ねられているように感じます。そのため、実際どのように使うか困惑している教師が多くなる課題があり、実際に機材導入が進んでも、活用されないケースがあるのではないかと感じました。
タブレットの家庭への持ち帰りについても、学校現場による裁量に委ねられているように感じますが、ここは教育委員会と学校が双方向となって方針を決めておかないと、低レベル、かつ、学校間格差が生じてしまうのではないでしょうか。ここはやはり“習うより慣れろ”を重視し、課題等はあると思いますが、持ち帰りフリーにして、いかに家庭学習においてスキルを磨くかを考えるべきだと思います。
学校の先生と教育委員会は職場が異なるので、各学校における個別のＩＣＴ機器や環境のニーズと、教育委員会の考え方や方向性が一致せず、予算化に至らないといった課題があるのではないでしょうか。
学校の先生は１日の労働時間が長く、かつ、業務量が多いと聞きます。このため、ＩＣＴを勉強する環境がなかなか作れず、故にＩＴリテラシーが持てず、ＩＣＴ機器を導入しても、教員が使いこなせないということが課題になっているようですが、本市においてもそれが当てはまるのではないでしょうか。
都道府県間でＩＣＴ教育に差が生じているのは、ＩＣＴ教育機材を学校に導入しても、学力向上に繋がらないため、教師は現状のままでよいという認識もあるようですが、授業を参観して、確かにその懸念はあると感じました。
紙に書いて覚えることの重要性を強調された学校もありましたが、リアルとオンラインとを授業においてどのように使いこなすのかが、今後の大きな課題であり、キーワードであると感じました。（ウイズ

コロナの時代においてＩＣＴ教育は緊急避難的なものではなく必要不可欠なものになると考えます）

林　　晴信

全体的な印象としては５月に市内の小中学校を視察した時よりは随分と落ち着いて学習しているように思えた。ただ残念だったのは授業を見ることができたのは各校10分間だけなので、授業のほんの一瞬を見たに過ぎないこと。その中での所感ということになる。

授業内容はＩＣＴ機器を上手く使って興味を引き出すような取組も見られたが、正直この内容をＩＣＴで行う必要があるのか？と思った授業もあった。ＧＩＧＡスクール構想とは教育ＤＸの一環として捉えるものとするならば、ただ単に教育で使う道具をデジタル化したとしても、そこで行われる学習内容が同じなのであれば、それはＤＸ（デジタルによる変革）にはならない。

教育ＤＸとは、データやデジタル技術を活用した教育を行うことで、学習の在り方や教育手法、教職員の業務など、学校教育のあらゆる面において変革を行うことにある。授業においては、デジタル技術を何にどう使うかで、児童生徒がより良き学びを得られなければならない。紙と鉛筆でできることを無理にタブレットでさせることではないはずだと思う。もちろん、最初に断った通り、授業のほんの一部を見ただけなので、その後の展開がデジタルならではの学びに繋がっているのかもしれないが。

このようなことからも、ＩＣＴを上手く組み立てた授業の好事例を各学校間で共有することが大事だと思う。「真似ることから学ぶ」ことは大事だ。好事例をインデックス分類し、ストックしていくことで、ＩＣＴ支援員（以下支援員と略）に授業の組立て相談することも減っていくことだろうと思う。

またそんな中で特に優れた授業を動画撮影・編集して市内全校で共有し浸透を図るべきではないかとも思う。さらにその動画編集を児童生徒にさせると良いＩＣＴ教育になるかもしれない。

視察の中で気になったのが、支援員への相談回数増の要望である。単純なトラブルへの対処からＩＣＴを駆使した授業の組立てまで需要は様々なものがあるように見えた。特に重小の校長先生は「できれば常駐でお願いしたい」とまで強く言っていたので、「トラブル対処と授業組立て支援とどちらの需要が大きいのか」と尋ねると、少し考えてから「どちらも」との返答だった。

重小に限らず、小中全体で、授業支援の内容を分類し、どのような内容に対してどの程度の支援が必要なのかを把握しないと支援員に対する要望は青天井になる。分類して内容把握してから、支援員でなけ

ればできないこと、ＩＣＴ推進担当者で解決できるもの、そして以前から言っているようなＩＣＴスクールサポーターを採用してできるものに分担させることが大事なのではないか。牛刀をもって鶏を割くは無駄になるからである。

もう一つ気になったのが、各校で自宅へのタブレット持ち帰りにばらつきがある点だった。毎日持ち帰りを指導している学校から、持ち帰らない方針の学校まで様々で、また同じ学校でもクラスによって持ち帰ると持ち帰らないが混在していて、これでいいのだろうかと思った。例えば、重春小学校では毎日持ち帰りの指導をしているのに、南中学校になると持ち帰らせない指導をしている。児童生徒からすれば困惑するだろう。さらにどうも中学校側は小学校が毎日持ち帰りさせていることを知らないといった構造的な欠陥も垣間見えた。文部科学省はタブレットを家庭学習に使うことを奨励している。西脇市教育委員会もそういう方向性にある。しかし現場ではまだまだそこに至っていない学校も多いように見受けられた。

文部科学省ではタブレットを家庭で使うにあたっての注意事項や、家庭内でのルール作りを家庭で子どもたちと話し合って決めるように言っている。

ご家庭で過ごす時間全体の中で、ご家庭で用意したデジタル機器も含めて、端末を、いつどのように使うか、お子様と話し合うことが大切です。

成長期のお子様のバランスの良い発達の観点からも、（使い方にもよるため、一概に何時間までならＯＫということはいえませんが）、お子様がさまざまな経験や活動ができるよう、ご家庭でもデジタル機器全般の使い方について、この機会にお考えください

～文部科学省ＨＰより～

さて、どれだけの家庭でこういうことが行われたのだろうか。

またＩＣＴリテラシー教育が家庭でどの程度行われているのだろうか。

文部科学省が推進しようとしているデジタルシチズンシップ教育への道はまだ緒に就いたばかりの印象しかない。

提案だが、文教民生常任委員会で小中保護者に対してＩＣＴを活用した教育（ＧＩＧＡスクール構想）についての意識調査アンケートをとってみればどうだろうか？

・現在学校で行われているＧＩＧＡスクール構想への取組をどの程度認知しているか。
・タブレットの持ち帰りに関してどのように考えているか（賛成・反

対双方あるはず）

・ＩＣＴを活用した教育についてどのようなことを望んでいるかetc.

Ｇｏｏｇｌｅフォームを使えばスマホで簡単に入力できるようなアンケート実施は難しくない。